



ἄγγελια 教養教育ニュースレター

「アンゲリア」というのは近代文化の故郷であるギリシャの言葉で「ニュース・伝言・メッセージ」という意味です。この言葉の派生語として「アンゲロス」という言葉があり、中世には「天使（英語でエンジェル）」という意味に使われました。教養教育推進センターは岐阜大学の学生・教員・スタッフに対する「情報提供の場」としてこの機関誌を作りました。これが教養教育にかかわって学生・教員・スタッフとの良い関係を作る天使となってくれることを願いながら。

ア ン ゲ リ ア

創刊号

ニュース・レターの発刊にあたって



教養教育推進センター長 佐々木嘉三

教養教育の在り方・教育内容・方法などについて広報活動を早め、さらに教職員や学生が自由に意見交換することが大切であるという考え方から、ニュース・レター「アンゲリア」の発刊を大へん嬉しく思っている。21世紀『知識基盤社会』に在って、大学教育でどのような専門的な学問体系を学ぶにしても「倫理観」や「広い見識」に裏打ちされた「教養」の必要性が求められていることは確かでありましょう。われわれ教員がその認識の下で自己研鑽しながら授業を担当し、学生と接触しているかは、自分の教員生活を振り返っても十分だったとは言えない。大いに意見交換しながらこれからの教育の在り方を考えて行きましょう。大学はその学生達に高等教育を行う『組織』ではありますが、人が人を育てているという認識を全教職員が意識して行かねばならないと思っています。

全共履修ガイダンス アンケート結果について

先に学生の皆さんに「全学共通教育の履修ガイダンス」にかかわってのアンケートをとらせていただきましたが、結果的に20パーセントを超える学生諸君が何らかの問題を感じてしまったようです。実際、履修の窓口で間違ったりまごついていた学生もかなりいたようでした。

他方、別途行った「クラスなどでの直接の聴き取り」では非常に厳しい意見が続出し、「分からなくては大変だから自分で努力した」ので何とか良かったけれど、ガイダンス自体はただの「きっかけ」となっただけで、そこで理解することはほとんどできなかった、という意見でほぼ一致していました。

これでは困りますので、教養教育推進センターでは、来年度は次ぎのようなやり方により考えております。皆さんもアイデアがあったら、ぜひお寄せ下さい。

1 全学共通教育と専門教育のガイダンスは別にします

これまでは「学部の教務担当教員」が「専門授業と並べて」全共の履修の仕方を説明していましたが、「混乱する」とか「教員は教養授業については良く分かっていないみたいだ」という声が多いため、来年度以降は「専門は専門」「教養は教養」とガイダンスを分けて、教養の授業については「教養教育推進センター」が行うか、ないし説明担当教員に事前に十分に説明内容を指示しておくこととします。

2 具体例をあげて分かりやすく説明します

「具体的に話して欲しい」という要望が多いため、できるだけ「具体例」で説明したいと思います。「履修案内」においても同様に「図解やチャート」あるいは「履修モデル」などを挙げて説明するように改良します。

3 必要事項にかぎって説明します

「後で振り返っても余計な話が多すぎる」という声もあるので、履修に関して「絶対に必要不可欠の事柄」に絞って説明するようにしたいと思います。なお、「学生としてのあり方とか大学・学部の内容や考え方、大学の授業の性格」とかがガイダンスの時に触れられていたこともあったようですが、こうしたことについては別途時間をとるように大学当局に進言することとします。

4 「履修案内」を作り直します

「履修案内が大き過ぎる、読みにくい、要領が悪い、考え方だの解説だのは必要ない、履修案内は履修の仕方だけを簡潔に記しておくべき」といった声に応じて「見やすく分かり易い履修案内」にしたいと思い、案の作成に入りました。

教養教育 授業訪問シリーズ No.1

フィールド科学概論Ⅰ ーご飯ができるまでー

大場伸也教授 ほか

この授業では、副題のとおり、米の種子まきから始まり、田植え、収穫、ご飯の炊き方までを実習を通して学びます。下の写真は、5月16日に行った田植えの実習風景です。当日は、あいにくの雨でしたが雨にも負けず田植えを体験していました。大部分の学生は、田へ入るのも初めてのようで、「にゆるにゆるして気持ち悪い」とか「こんなのイヤだ」とか言っていました。慣れるに従って作業も進み、なんとか田植えを終了しました。収穫が楽しみです。



(慣れない作業で腰も痛かったことでしょう。昨今の田植は機械化されていますが、一昔前までは、農家総出で手植えをしたものでした。昔の農家の人の苦勞を味わえたのは、貴重な経験になったことと思います。)



「教養」とは何か？

藤村喜章

地域科学部地域文化講座4年生

「教養」とは何か。難しい問いである。ただ、どれだけ素晴らしい教養の理念に従った授業やカリキュラムがなされようと、学生側が主体的に何かを学び、考え、表現しようという気持ちがないならば、教養教育の理念は達成されないように思う。抽象的ではあるが、この主体的に学び、考え、表現することに「教養」の一部が含まれているのではない。

そのような前提にたつて次の二点を指摘したい。まず、教養教育とは単に「知識」を教えてもらったり、増やすための授業を意味しない。「教養」とは自ら学び、考えようとする中にもある（「専門」か「教養」かという二者択一の議論の多くは「教養」を「知識」としてしか捉えていないように思う）。

次に、授業は先生だけでなく、学生も構成している。授業を良くするも悪くするも先生だけでなく学生にもかかっている（学生はただの授業の「消費者」ではない）。そのような体制でこそ学生側からの意見が教養教育の理念をより具体化するように思う。以上二点をあげたがいずれにせよ主体性は「教養」にとって欠かせない要素ではないだろうか。



FD 研究会を開催します！ ふるってご参加下さい！

テーマは「授業評価アンケートのあり方」について、その問題点と提言

「授業評価」の実施は、現在、社会的にも外部評価機構からも、よく要請されています。岐阜大学教養教育推進センターは、「授業改善」を目的に、そうした学生アンケートをすでに実施し、学生の満足度という視点から「モデル」となりそうな授業をピックアップして公表することも試みてきました。

しかし他方で、そうした学生アンケートのあり方や評価項目についてさまざまな問題が見いだされ、学生・教員双方から疑問が指摘されてきました。

とくに「学生による授業評価」が「教員評価」に使われるのではないかという懸念の声や問題点の指摘は多く、この点に十分配慮した「授業評価」のあり方を考えねばならないと思います。

そこでセンターとしては、授業評価のあり方を再検討したいと思い、「案」を作りそれを全学での考察のテーマとしたいと考え、教養教育推進センターFD研究会のテーマとすることとしました。

研究会では、以下の点について、ディスカッションします。

- 1 学生による授業評価の意味と問題点
- 2 教養教育推進センターの理念と問題意識
- 3 現行のアンケートに対する問題点の指摘
- 4 18年度後学期に実施予定のアンケート素案

とくに、18年度後学期に実施が予定されている「授業評価アンケート」において、従来の「学生による授業評価」以外に「教員による自己授業並びに学生評価アンケート」と「学生の勉学意識に関する自己評価アンケート」を加えて、三つの視点から一つの授業を顧みることを提題します。これは全国的に独自性がある反面、いろいろと問題もあると思います。みなさんのご意見をいただきたいと思います。

平成 18 年度 第 1 回 FD 研究会

日時 平成 18 年 7 月 5 日 (水)

午後 3 時～5 時

場所 全学共通教育講義棟 105 教室

主催 教養教育推進センター



平成 15 年度岐阜大学全学共通教育 FD 研究会の会場風景。「大学における習熟度別学習の現状」をテーマに発表・報告・質疑応答が行われた。

質問・意見箱を設置しました！

「みなさんの声を寄せてください、すぐ返事します」

教養教育について「何なのだろう?」「どうして?」「こうして欲しいな」「こういう工夫はどうですか」といった疑問・意見・提案などを、全学共通教育事務室の前の「教養教育についての声の箱」に、そこに用意した用紙を使って書いて下さい。

教養教育推進センターからすぐに返事を書いて、傍らにぶら下げている「返事のボード」にその返事をはっておきますので、見て下さい。

返事の相手が分からなくては困りますので、投書の用紙には学部・学年・氏名を書く欄がもうけてありますが、内容の関係で「本名」を知られたくない場合は、自分に分かる「ニックネーム」等を書いておいて下さい。

ただし「個人的中傷」とか「法的に問題」となりそうな内容の場合は「ボツ」とさせていただきます。氏名が明記してあり返事ができる場合には「ボツ」とした理由を返事します。

Eメールでの質問・意見も受け付けます。メール・アドレスは、szjyohos@cc.gifu-u.ac.jp です。



編集後記

教養教育推進センターの機関誌として「アングリア」を発刊させていただきました。全学的にさまざまな学部のありかたやセンターの様子などが分かりにくく、それが全学を一つにまとめていくことを難しくしていると思います。

とりわけ教養教育推進センターは「すべての学生・教員」にかかわるセンターですので、センターからの分かりやすい情報はとても大事であると考え、それと同時に教養の授業の様子な

ども紹介して、教養教育の授業にたいする理解を一人でも多くの学生・教員・大学スタッフに持ってほしいとの願いを込めて発刊に至ったものです。

これが今後どのような働きを示すものになるかは、全学の学生・教員・事務スタッフの協力によっていると思います。どうか見守っていただきたいと思います。願っております。

編集責任者 教養教育推進 副センター長 小澤克彦